未来日記パラレル

ray

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未来日記パラレル

【Ｎコード】
Ｎ３９１５ＢＡ

【作者名】
ｒａｙ

【あらすじ】
活動報告で言っていた作品が行き詰まり、気分転換に進めていたらいつの間にかこっちの方が一段落ついているという不始末、一体どれほど転換していたというのか。

未来日記の二次です。
二次は初めてですが、お願いしますｍ（　）ｍ

パラレルなどといっちょまえに横文字なんぞ使っていますが、どちらかというと、もしも的なこうだったらいいのに的な気持ちでやってます。

かなりざっくりと言うと概ね原作準拠ですが、細々とした変更はその都度前書きにて提示したいと思います。

読んだよー的なのとかよかったよー的な感想など気軽に頂ければ幸いでございますm（＿＿）m

あと、何分至らぬ所しかございませぬので、他にもダメ出しも頂ければ非常に嬉しいですm（＿＿）m

※ｐｉｘｉｖ他にて重複投稿予定

1（前書き）

本物語は原作2巻終わり寸前から開始で、それ以前は原作通りです。

1

春日野椿は、信者に取り押さえられた天野雪輝の唇に、自身のそれを重ねた。

そして、彼の閉ざされた唇の隙間を割って舌を挿入した。

我妻由乃へ向けられた挑発的な眼差し。およそ愛し合う者どうしの行為からは酷く遠くかけ離れたキス。口腔内へ侵入した舌は、雪輝のものを一方的に犯した。

始終彼女のなすがままにされていた雪輝だが、彼には椿のその行為が、酷く自虐的なもののように感じられた。唇や舌の感触は酷く曖昧なのに、なぜかそれだけは確かだった。

椿が唇を離す。雪輝の下唇と椿の舌を、だらしなくたわんだ唾液が繋ぐ。その間も視線は由乃を捉えたまま。

信者たちに捕えられたままの状態の由乃は、驚愕に目を限界まで見開いた。体は小刻みに震えている。

ザザーッ。

タイミングを見計らったように日記から未来が書き換わる音がした。椿はその音をはっきりと聞いた。

「さて、これでようやくＤＥＡＤ　ＥＮＤも消え……」

視線を自身の日記に移す。日記が紡ぐ新たな未来は。

「え……？」

彼女の日記には依然、ＤＥＡＤ　ＥＮＤの文字が。

「そんな……馬鹿な……。未来は確かに書き換わったはずなのに！！」

焦りのままに声を荒げる彼女は、日記の詳細を目で追った。

そして、我が目を疑った。

「これは、一体どういう……！？」

顔を上げると、椿はなぜか雪輝を見た。

しかし、この場で彼女がそれ以上日記の詳細を考察する時間はなかった。

「ユッキーをぉぉ……汚すなぁあああああ！！！」

信者達の拘束を振り払った由乃は、椿に向かって弾丸のような速度で駆けた。

「馬鹿な！　大の大人が二人がかりで組み伏せてたのよ！！」

椿の焦りも意に介さず。由乃は速度を殺すことなく、近くにいた

信者から斧を奪い取り、勢いそのままに大きく振りかぶり椿に切りかかった。

「死っ、ねぇぇっっ！！！」

――マズイっ！　日記を守らないと……！

――

無音だった。何もかもが。

それを目の当たりにした者たちや、それを取り囲む環境の一切が停止したような、無音。

雪輝。

信者達。

由乃。

そして、当の椿さえも。

ボト。

無音の中に微かな音が咲いた。まるで何かの冗談のようなアクセントだった。

音のした方を、まるでこの世のものではないというような風に見つめる椿。

床に転がる自分の右手首。

それを見て初めて、自分の手が由乃に切り落とされたのだということを理解した。

痛みは、それに遅れて訪れる。

「あああああああああッ！！　腕が……腕がああああああああーーーーーーー！！」

無音は断末魔の叫びで破られた。

滑らかな切断面からは血がとめどなく流れ出てくる。

由乃はそのまま雪輝へ向き直ると乱暴に斧を振り、信者達を彼から引き剥がす。

そして自分の未来日記を預けると、雪輝を渡り廊下から庭へ突き落とした。

「私の日記を見ればユッキーはきっと大丈夫だから。逃げて！」

それを最後に、今度こそ由乃は信者達に取り押さえられた。

←

「我妻は捕まり、雪輝は逃亡……。俺たちもいずれ見つかる。そして、頼みの応援も絶賛足止め中か。こりゃ全滅かな」

屋根瓦の上に身を潜めて、雪輝たちの動向を追う来須とみねね。二人は互いの腕を一つの手錠で繋いでいる。

スプリンクラーを作動させた来須はそのまま地下牢へと潜り込み、今まさにそこから脱出しようとしている雨流みねねと鉢合わせた。先述の方法で彼女を拘束した来須は、信者の目を避けて、二人でこの屋根の上に辿り着いた。

「全滅かな、じゃないわよ！　さっさと手錠（これ）を外しなさいよ！　刑事と共倒れなんて無駄死にもいいところだわっ」

１２ｔｈから解放され、ようやくこの忌々しい宗教施設からおさらばできると思った矢先に、今度は４ｔｈに付き合わされる羽目になって、片手が不自由な状態でこんな屋根瓦の上にまで登らされたかと思いきや、４ｔｈの全滅発言である。９ｔｈの苛立ちもさもありなん。

冗談じゃねえ。んなこと勝手に決めつけんな。あたしにはこんな状況にあつらえ向きな日記があんのよ。滅ぶんならてめえ一人で滅びな。

だから手錠を外せってんだ。

「いいだろう。交換条件付きなら外してもいいぜ９ｔｈ」

みねねの怒りも無視して、少し考えた後に来須はそう言った。

……え？

「？　交換条件！？」

確かに手錠を外させたいのでそうやって言ったのだが、条件付きとはいえ易々とそんなことを言ってのける来須を気持ち悪く感じ、みねねは訝しがるような、彼の真意を探ろうとするような微妙な表情を浮かべた。

そして来須が、その真意ともいえる条件を提示した。

←

「んっ、あああぁ……」

お目方教本部内の一室。椿はそこで手当てを受けていた。もっとも、手当と言っても腕が切断されているとなれば、手元にある医療器具だけでは根本的な治療は到底望めない。信者の中に医学に明るい者が居たというのがせめてもの救いである。

切断された右手は、この部屋にはなかった。

由乃は椿たちのいる一室に至る廊下にて大勢の信者によって拘束されている。先ほどのように振りほどかれるという可能性は、ほとんどないと思われる。

――「視える」世界と「視えない」世界。

――いつもだ……。

――私を苦しめる者はいつも「視えない」世界からやって来る。

たとえ今のような状態であっても、長い間に亘って行われてきた儀式のせいでそれ以外の時に男性信者に触れられるというのは、椿にはどうしても受け入れられなかった。

「――――方様」

件の男性信者に指示を仰ぎながら、一通りの処置を施し終えた信者、美神愛が呼んだ。

しかし、椿は痛みに耐えるようにして歯を強く噛みしめながら、自身の忌まわしき過去を思っていたために気付かなかった。

「……お目方様っ！？　失血がひどすぎます。これじゃ命に……！」

語気を強めた愛の二回目の呼びかけで、椿は今、そして未来を取り返した。

止血はほぼ完成したが、それまでに失った血液はかなりの量になる。

「……うるさいわね……、これくらいイッ……へ、平気、よ……」

真剣に身を案じる愛の言葉にも彼女は意を介さない。

言葉にした所で我が身を取り繕うことができないというのが現状だ。

体はガクガクと震え、呼吸は荒く、顔色は蒼白。いつものようなきちんとした正座ではなく、それを崩したような恰好で左手を畳に着いて、どうにか意識を保っているといった様子だ。俯いた顔、長い髪の間から、時折苦悶に必死で耐えるような表情が覗く。

誰がどう見ても平気とは思えない。

それでも、見え見えの虚勢を張ってでも、やり遂げなければならないことが、今の椿にはあるのだ。

――父と母が死んでから。

――私はずっと教団のなぐさみものになってきた。私はその苦痛に、耐えてきたのだから。

――あと、少し。あと少しだから……。

汗が、滴り落ちる。意識が揺らぐ。

このまま気を失えば、二度と目を覚ますことはない。そんな予感がある。

だから、何としても意識だけは保たなければならない。

それに。

こんな所でＤＥＡＤ　ＥＮＤになるわけにはいかない。

日記通りにＤＥＡＤ　ＥＮＤを迎えなければならない。

愛と、彼女と一緒に手当に携わった宮代お鈴という信者の力を借りて何とか立ち上がった椿は、途切れ途切れながらも、必死で言葉を紡いだ。

「今より……神託を、告げます」

千里眼日記のことは信者たちは既に把握している。だから、彼らは彼女の言う神託などという言葉はまやかしであるということも知っている。元よりそんな力が備わっていないことなど、自分が一番理解している。

しかし、予断を許さないという状況にあるにも拘らず――あるからこそ、とも言える――放たれた懸命のそれには、不恰好ながらも、自身を奮い立たせようとする強い矜恃が込められている。

椿は千里眼の巫女として、春日野椿本人に対してその言葉を投げかけたのだ。

2（前書き）

原作御目方編＋α程度にエロティックな部分が出てきます。
グロはないと思います。

2

お目方教本部。本堂の床下に雪輝は身を潜めていた。由乃に言われるままに信者達から逃れ、ここに辿り着いた。

すぐそばで、信者達が自分を探している気配を嫌と言う程感じたが、幸いなことにしばらくすると彼らは遠ざかって行った。

ひとまずは難をやり過ごしたとはいえ、再び近くまでやって来るかもしれない。由乃から受け取った雪輝日記がそれを予知するまでは、とりあえず地面に仰向けに寝転がって心身を落ち着かせた。

――椿さんに裏切られた。何で？　悪い人には見えなかったのに。

――結局由乃が正しかったんだ。由乃はずっと僕を守ろうとしてたんだ。

これまでの事を思い出した。色々なことがあった。その結果が、自然と瞳から零れ落ちた。

雪輝は涙ながらに由乃の日記を見つめる。

雪輝日記。その名が示すように彼女の日記には彼の未来が逐一表示されている。

そこには雪輝自身の未来の他に、由乃の彼への思いが添えられている。

“ユッキーとデートすることになる。
こんな日が来るなんて夢みたい。”
“ユッキーの手が一瞬触れる
ど、どうしよう手をつないじゃおうか。”
――由乃は実際異常なのかもしれない。
ストーカー癖。女子中学生とはとても考えられない身体能力。
それに、彼女の家。あのふすまの向こう。
――でも、それ以上に確かなのは……。
画面をスクロールさせていた、その手が止まる。
“どうしよう大好きな気持ちが止まらない。
好きよユッキー。”
そこには、そう書かれていた。
――僕の事が好きで、守ろうとしてくれたって事だ！

「どうするんだよ」

自分に問いかける。ほとんど答えは出ていたが、何かを選ぶということは同時に何かを捨てるということでもある。

一方を選べば、必ずもう一方と対峙することになるだろう。そうなると、相手を殺すことになるのかもしれないのだ。逆だって考えられる。

殺すのも、殺されるのも嫌。

それが結論を出させなくしている。

「誰も選ばないまま逃げちゃうのかよ僕はぁ」

自分で吐いた情けない言葉で更に情けなくなりながらも、涙目をぐしぐしと擦って上半身を起こした。

そして、何ということもなく辺りを見渡すと、礎石とそれを囲うようにしてできた小さく盛り上がった土の隙間に、何かが挟まっているのに気が付いた。

近くまで這って行き、雪輝はそれを拾い上げた。

それが何かを確認している途中で、どこかからスピーカー越しの声が聞こえてきた。

椿の”神託”は終わり、由乃は信者たちに引きずられるようにして部屋の中へ入ってきた。

「お持ちしました」

椿は由乃を警戒しながら、お鈴が持ってきた連絡用のマイクを受け取る。

依然表情は険しく、足元もふらついてはいるが、それでも”神託”の前後では、そばにいた信者達には随分と違う印象を与えている。

「何を始める気！？」

険のある目で椿を打ち据える由乃。

「本当は乗り気じゃない、なんて言っても……っ、信じてはもらえない、でしょうけど……」

そう言うと、怪訝な表情を浮かべる由乃を尻目に、マイクを通してどこかのスピーカーの向こうにいるであろう雪輝へ向かって声を飛ばした。

「……私と同じ目に、ぃッ！……あうがいいわ」

←

椿は信者に目配せをした。

それを確認した信者達は羽交い絞めにされた由乃の服を破いた。

「あ」

中学生としてはかなり発育の良い由乃の乳房が露わになった。

直感的にそこに原因不明の敗北感を感じながらも、瞬時にそれを払拭しながら椿はマイクに言葉を乗せる。

「押さえて順番、に、犯しなさい」

「穴は一つじゃないんだから同時にでもいいわよ」なんてことを言おうかとも一瞬思ったが、やめた。いくら演出とはいえさすがにそんな馬鹿なことを言う趣味も余裕もどこにもない。

そう。これは、演出。

ＤＥＡＤ　ＥＮＤに至るための。

←

「聞こえてるかしら、雪輝君。もうすぐ２ｎｄが傷物になっちゃうわよ？」

雪輝は床下でそれを聞いていた。マイクが、椿の声の後ろから発せられる由乃の声を拾う。

「や！　あっ！　ヤダッ！！　ヤダよっ！！　私の最初はユッキーって決めてるんだからっ！」

「助けたければ出てきなさい」

まるで計算されたかのようなタイミングでの椿の一声。

――由乃！！

ぶるぶると震えながらも由乃の身を案じる。しかし。

――今出ていけばきっと殺される。

椿が待ち構えている場所にはきっと大勢の信者が居る。普通に考えれば未来日記に頼るまでもなく、数で圧倒される。

自分にＤＥＡＤ　ＥＮＤフラグが立っていないとはいえ、どう抗っても逆転できるとは思えない。

答えはもうそこまで出ているのに、恐怖に囚われて決定打が打ち出せない。

――でも、僕は由乃を見殺しにして……。

――それでいいのかっっ！！？

「ユッキーーーーィィィっっ！！！」

それ以降、スピーカーからは何も聞こえなくなった。

由乃が僕を呼んでいる。

昨日。遊園地で由乃と観覧車に乗った。縁起でもない事だが、その時の情景や由乃の言葉が、まるで走馬灯のように突然浮かび上がってくる。

観覧車の中、二人きり。

ビルの向こうに沈んでいく夕陽。空はオレンジ色。観覧車の稼動音やゴンドラの微かな揺れと、特有の停滞した空気の匂い。

何もかもが心地よかった。

由乃は僕の額に、静かにキスをした。

この時、二人の乗っているゴンドラがもうすぐ一番高い所にくるところだったのを、僕はぼんやりと覚えていた。

顔を上げた由乃はとても恥ずかしそうにしている。僕も何だか恥ずかしくなってきて間が持たなくなったから「何でおでこなのさ……？」なんてことが自然と口をついて出た。実際前みたいに舌と舌を絡ませるのがよかった。この子と一緒に、またあの感覚を味わいたかった。

すると由乃は言った。

「次は、

ユッキーからしてね。

私はいつだってユッキーを守るから。

そのご褒美に」

はにかみながら。でも、とても幸せそうに。

雪輝は駆けだした。

2（後書き）

何だろう。起承転結で言えば承になるんだと思います。
章の切り方で悩んでいたのですが、棚ぼた的にうまく型にはまってくれたのではないかという、自賛できないやったった感が少しあります。

あと、敗北感とか穴などの余りにも空気の読めない描写は、敢えて焚火にダイブするような気持ちでやってしまいました。

次で一波乱あると思います。いつもより少しばかり長いです。

3（前書き）

ここから割と色々と悶着があったりなかったりします。

3

「もういいわ」

お鈴にマイクを返すと、椿は信者達を制した。

信者達は、拘束している者を残して由乃から離れる。

「？　何のつもりよ」

由乃は椿の意図を掴みかねている。彼女はついさっき信者達に順番に犯せと命令したはずだ。それなのに彼らがそのようなことをしようとしている素振りは一切見受けられない。

「雪輝君は、もうすぐここに……来るわ」

椿は由乃の問いには答えずに、別のことを口にした。

二人は数メートルほどの距離を隔てて相対している。

椿のか細い声は、それでも由乃の耳朶を強かに打った。その確信に満ちた言葉を聞いて、由乃は、たとえ本心だったとしても雪輝に助けを求めた自分を強く責めた。同時に、責めたところで恐らく未来が変わるわけではないだろうという予感もあった。

６ｔｈが確信めいた風に言ったのは、きっと日記にそうやって書かれていたからだろう。来てくれるのは本当に嬉しいが、状況が余りにも悪すぎる。

信者達は由乃と椿を取り囲むような形で人垣を形成している。そんなところに飛び込んでいったところで、勝算なんて幾らもない。由乃にはそれを見出すことができなかった。

「逃げて」と言いながら、結局自分が雪輝を追い詰めたのだ。

歯痒さのはけ口を求めるようにして、由乃は両手に力を入れ信者達を振りほどこうと強くもがいた。しかし、先ほどの失敗から学んだ彼らは、頑として離そうとはしない。

由乃は椿を睨みつけたが、椿はそれを無視した。意識を失ったように何度も膝から崩れ落ちそうになりながら、開いたふすまから除く廊下、あるいはその先を見つめていた。

まるで、千里を見通すような眼差しで。

そんな形の膠着状態がしばらく続いた。

均衡は、廊下から聞こえてくる力強い足音によって崩された。

由乃も椿も、次第に鮮明になっていく音をそれぞれの複雑な思いで聞いた。

←

「ゆっ、由乃から離れろォォっっ！！！」

椿たちの居る部屋に入ってくるなり、雪輝はどこかから拾ってきた斧を振り回して信者達を追い払った。

追い払われた信者達は、雪輝が同じように由乃を拘束している信者たちを追い払っているのを横目に再び人垣を形成した。その様は、あたかも巨大な原生動物が雪輝を捕食したかのようだった。

斧の重さに負けて、振るう度にみっともなくたたらを踏む。先ほどの由乃とは似ても似つかない。

見てくれはどうであれ、ともかく由乃を開放することには成功した。両手で握っていた斧を傍らにうち捨てると、彼は自分の上着を下着姿の由乃の肩からかけてやる。

「ありがとう……。雪輝、君」

椿がそんなことを言った。由乃のそれを遮るような形となった。

椿に謝意を述べられたが、なぜこのタイミングでそんなことを言われたのか、その理由は雪輝にはわからなかった。

しかし、だからといってそれで自分の決意が乱れることは決してない。

それがこの時の雪輝の応えだった。

「２ｎｄを守る」

「そう……それはっ、残念だわ」

やはり雪輝の目にも彼女がただならぬ状態にあるということはっきりと見て取れた。

「でも……あなた、私の日記を破壊する気？　……無駄よ。私と……信者たち、の前に姿を、さらした以、上……」

それでも椿はあくまで――決して成功していなくとも――平静を装い、毅然とした居振舞いを崩そうとはしない。

それは、ろうそくの火が消える寸前の、一瞬の強い輝きのような危うさを孕んでいた。

「そうだね。こっちの日記もそう予知してるよ。でも」

しかし、雪輝もその姿には気圧されていない。決意のこもった眼差しでキッと椿をね睨め付ける。

そこには今宵、春日野椿を殺すという確かな覚悟がある。

「ＤＥＡＤ　ＥＮＤフラグはまだ立ってない」

彼が左手に握っている未来日記からはノイズは聞こえていない。

椿の日記には依然ＤＥＡＤ　ＥＮＤという文字が記されているし、彼女にしてみればそうでなければならない。今のところ、椿の計算通りに事は運んでいる。

しかし、だからこその、輪郭のはっきりしない迷いが生まれた。それは容易には振り解けなかった。

未来なんて、一秒で決まる。その一瞬を踏み違えないように、既に意識すら危うい現状にも関わらず、椿は今を必死で耐えている。

あの日以来抑圧されてきた感情、書き換わった未来が引き金となり爆発的に噴出し始めた底知れぬ囚われ、執着、執念。意識を繋ぐ糧として、これ以上に上質のものはない。

「これは僕の力で逆転可能な未来だ！」

そう言って由乃を見遣る。雪輝を見つめていた彼女と目が合う。彼がここに来てから、彼女はずっとそうだった。

いや、更に以前。あの日の放課後から、ずっと。

「――由乃を選ぶよ」

「え？」

由乃は聞き返したが、雪輝は既に椿を睨みつけていたために表情はわからなかったし、返事が返ってくることもなかった。

←

――こうなるなんてわかりきったことじゃない。日記なんて読まなくても、わかる。

雪輝の決意を受けて椿は思った。

どうしてこんなことになったのだろう。椿は、かつての自分がこの世界をそうしたのと同程度に自分自身を呪った。

「由乃を選んで二人で生き延びる！」

雪輝は椿に向けて高らかに宣言した。

――笑いたくなるぐらいの正論。

雪輝の言葉に笑って賛同の意を送ってやりたかったが、血を失い過ぎていたからか、それとも他の理由からか、笑えなかった。

処女を失って以来結局今まで、私は何者にも救われることは無かった。

”二人で”生き延びるということの意味。

雪輝君は確かに私の手を取ってくれた。そうやって短いながらも彼と行動している間、長い間忘れていた感情を思い出させてくれた。

本当は嬉しかった。

世界を消滅させるなんて大それたことなんか諦めて、あのまま二人をここから逃がしてしまった方がよかったのかも知れない。そうすれば右手を失うこともなかったかもしれないし、ＤＥＡＤ　ＥＮＤフラグも回避できたのかもれない。

だけど、それも今となっては考えた所で詮の無いこと。

私は二人を裏切った。そんな私が雪輝君に選ばれるはずなどないんだ。救われなかったんじゃない。拒んだのは、自分自身。

こうして私は――かつて愛やお鈴たちがそうしてくれた時と同じ――差し伸べられた優しい彼の手を自ら振りほどいてしまったのだ。だからこうなるのが当然の因果律だ。

――それでも。

――その愚かな行為をどれだけ呪おうとも。

今は差し伸べられた手を自ら振りほどいてしまった愚かな自分を信じるしか未来はない。

←

「由乃を選んで二人で生き延びる！」

覚悟は、決めたつもりだ。

――後は。

――一瞬でいい。予知を妨害できれば。

椿は日記の端を右脇に挟んで、もう一方を左手で広げている。

雪輝は椿に向かって走りながら、どこからか取り出した手毬を右手で前方に高く投げた。

信者達は皆彼の投げた手毬に注目している。

ザザザーーーッッ。

雪輝の無差別日記と、彼のポケットの中にある雪輝日記が書き換わった。

しかし、今はそんなことに気を割いてはいられない。

一瞬、一投。そこに全てをかける。

足を止めることなく、空になった右手を素早く腰に下げたダーツホルダーに伸ばしてダーツを取り出した。

椿は、弱視らしい目で、手毬を一生懸命に捉えようとしている。

――大丈夫、きっとうまくいく！

狙いは、椿の日記。

余程手毬に気を取られていたのか、彼女はようやく日記を守ることに意識を切り替えたようだ。

――まだ大丈夫だ。それにこの距離なら外すことは無い。

彼はダーツの腕には自信がある。３ｒｄに襲われた時も、あの距離からほんの一瞬の隙を狙うことができたのだ。しかも椿の日記は広げられているため、かなり狙いやすい。

右手を後ろに引いて投げの動作に入る。そこで。

椿と、目が合った。

――なぜ？　日記を守らないのか？　それに。

なぜだか、重傷に耐える苦悶の奥に、悲しそうな表情が見て取れたような気がした。

ザザーーッ。

未来が書き換わる音。

音は、椿の日記から聞こえてきた。

「え？」

――確か……。椿さんのＤＥＡＤ　ＥＮＤフラグは……。

頭で考えたところで完全に動作に入っていた体は止められなかった。思考の迷いが中途半端なブレーキとなったままダーツが指先を離れる。

「ユッキーらめぇえええええええ！！」

その寸前、突然の事。言葉の内容よりもただ反射的に音のした方を振り返る。

信者が眼前に立ちはだかり、斧で切りかかってきた。

奇しくも一瞬の迷いのおかげで、ギリギリながらも投擲から回避へと行動を切り替えることができた。

薙ぐようにして襲ってくる凶刃を、眼前に迫りくる恐怖を、後ろに飛び退くようにして躱す。

「うっ！？」

傷こそ負ったものの、奇跡的に致命傷は免れた。

しかし、それが全てだった。

出血と遅れてやって来た鋭い痛みに、雪輝の覚悟は完膚なきまでに粉砕された。

そして、心が恐怖に支配される間もなく、もう一人の信者に後ろから切り付けられ、受け身を取ることもなく畳に倒れ込んだ。

その衝撃で、無差別日記が雪輝の手を離れる。

「ユッキーーーーィィィっっ！！！」

由乃が叫んだ。

雪輝は反応しなかった。まだ息はあるが、今度は確実に命を奪いうる程度に負傷している。雪輝の中から零れ出してきた赤いものが畳の表面にその領土をどんどん拡大させていく。

手毬は信者の手の中にあった。

彼の行動は、千里眼日記によって既に予知されていたのだ。

3（後書き）

……椿さんを救いたかったんじゃいｏｒｚ

この章はあと１つか２つあります。

未来日記は能力・戦い・ＣＰ（申し訳程度）などなど色んな組み合わせを考え、設定は可能な限り原作準拠にそれを展開させていくのが非常に面白いです。稚拙ではありますが私の考えたそういったものを今後も披露していければこれ幸いにございます。

さて、順調にストックを消費している割に次章がアレないつもの症状が出てきましたｏｒｚ

まだざっくりとは組みあがっているというだけ前よりはましだったと言える（のか？）

4（前書き）

評価そしてお気に入り登録誠にありがとうございますｍ（＿）ｍ
すごくモチベーションになりますｍ（＿）ｍ

予約投稿するつもりが気づけば既に上がっていたというｏｒｚ
このサイトを利用させていただいてからこの方、このイージーミスが止まらぬですｏｒｚ
推敲し終わって使い果たした気力ではそこには気づかんのですｏｒｚ

千里眼日記の表記が原作と違ってきます。
いや、まぁ３読んだら容易に想像つくでしょうけど一応前言通りに（苦笑）

4

※

ＤＥＡＤ　ＥＮＤは覆らなかった。

１２ｔｈが死んで間もなく、椿は確かに未来が書き換わるノイズを聞いたのだ。にもかかわらずということは、一体何を意味するのか。

今、何が起こっているのか、そして、これから何が起こって自分は死ぬことになるのか。ＤＥＡＤ　ＥＮＤに至る詳細を読んだ。

同じＤＥＡＤ　ＥＮＤという結果に違いはなかった。だが、そこに至る過程が書き換わったのだということはすぐにわかった。

書き換わる前の未来日記。そこにはただ「今宵、春日野椿は殺される」とだけ書かれていた。

千里眼日記は、信者たちの未来の報告が記される日記である。殺されるという未来の報告がある以上、本来ならば、誰に、どうやってといった細部まで報告されるはずである。しかし、１２ｔｈのように催眠術を用いて、信者たちから春日野椿が殺されたというその寸前までの予知を妨害できたなら、「今宵、春日野椿は殺される」とだけ未来が記されるということも起こりうる。

それが、１２ｔｈは死に信者達も術から解放されたことで、ＤＥＡＤ　ＥＮＤに至る子細が更新された。

それを読み取った椿は、余りにも唐突に表れたその二文字に我が目を疑い、それを椿のもとへもたらした雪輝を、得体のしれない物を見るような奇異の眼差しで捉えたのだった。

――１ｓｔが何かを投げた。

――投げられた手毬を見る。

――投げられた手毬を見る。

――投げられた手毬を見る。

――投げられた手毬を見る。

……

――ダーツがお目方様の日記に突き刺さっている。

更新された日記には、確かにそう書かれていたのだ。

手毬。

このような形で母の形見の、こんな境遇の自分の唯一の支えだった手毬に再会できると日記は予知している。たとえ希望的観測だったとしてもその手毬は、母の形見のそれだとしか考えられなかった。

なぜ１ｓｔがそれを持っているのか。それを眼前にした所で、日記の予知によれば自身は死を迎える。それさえ回避できれば、手毬がまた自分のところに戻ってくるかもしれない。「視える世界」で、ずっと私を支えてくれる。そう考えれば、今はこんな世界を消し去るなどという些事なことは、やはりどうでもよかった。

生きたい。

様々な思いが駆け巡ったが、それは、由乃の奇襲に遮られた。

←←

雪輝がうつぶせに倒れたまま顔を上げると、数十センチ先に自身の携帯電話が落ちている。手の届く距離ではないが、ディスプレイが偶然彼の方を向いていたために、そこに書かれた文字を読み取ることができた。

――斧を持った信者が後ろから切りかかってくる。

――斧を持った別の信者が後ろから切りかかってくる。

そして、次に書かれている文字を見た雪輝は。

頭だけを動かして、朦朧としたままで椿を見た。

やはり、それは悲しそうな表情なのだと確信した。

でも。あんなにあっさりと自分たちを裏切ったのに、どうしてそんな顔をしているのだろう。やっぱり悪い人には思えない。

今わの際にもかかわらず、なぜかそんなことを考えた。

結局、雪輝がその理由を知ることは未来永劫、なかった。

雪輝に一太刀目を浴びせた信者が、無差別日記を拾い上げた。流れ続ける血流に浸食される寸での所。別に頃合を見計らっていたというわけではなく、ただ自然とそうなった。

信者が椿に歩み寄る。椿はそれを、彼の手に触れることなく受け取った。

体から力が抜けて来た雪輝は、殆ど重力に従うようにして頭を垂れた。命の零れ出る量が椿の比にならない。誰がどうみた所で、彼は助からない。

死は寸前にあれど、その寸前まで痛みは雪輝を苦しめる。

椿は表情もそのままに、何かを伝えた後、雪輝の未来を破壊した。

「うわあああああああああ」

近くにいた信者にさえはっきりとは聞き取れなかった言葉。それが彼に伝わったかどうかは定かではない。

最期の力を振り絞ったような切実な絶鳴を最後に、雪輝はこの世から消滅した。

←

その一部始終を目の当たりにした由乃は、焦点の定まらない両の目もそのままに放心状態で項垂れている。現実とその受け入れを拒む自分がせめぎ合っている。

一度雪輝に振り解かれたが、彼が椿と対峙している最中に信者が三人がかりで再び拘束していた。その信者たちが由乃の様子を訝り、様子を伺おうとしたその矢先。

項垂れていた顔が急に仰いだ。

先ほどまで焦点を結ばなかった瞳は瞼の限界を超えて見開かれ、その視線は射殺さんとばかりに椿に突き刺さる。

事態に気付いた時にはもう遅かった。彼女を拘束していた信者たちは元居た場所から数メートル後ろへ振り払われていた。

心の奥底から沸き立つマグマのような怒りが由乃に更に人外の力

を付与した。

その姿に気圧されながらも、武装した信者たちが彼女の前に立ちはだかる。

武装した上に多対一。にもかかわらず、由乃を抑え込むことはできなかった。それどころか圧倒的劣勢に立たされている。今の彼女に対しては、武装も数も些かのアドバンテージにもならない。

まるで、悪魔に魂を売りでもして手に入れたような、そんなデタラメな力を爆発させる女子中学生。

由乃はある程度の数を蹴散らし終えた所で、目標を変えた。信者を殴り倒して奪った斧を両手に握り、信じられないような速さで椿に肉薄した。

「ブッ殺おおおおおおおおぉぉォおおォォォォォォおォおおっっっッッス！！！！！」

議論の余地など、どこにもなかった。

由乃の頭上高く振りかざされた斧が畳に落ちて、くぐもった音を鳴らした。

「死ねえええええええええええええシ……」という呪いの断末魔と共に、我妻由乃はこの世から消滅、霧散した。

椿の足元には、破壊された雪輝日記が散らばっている。そこに広

がっているはずの血の海は、本人と共に既に消滅していた。

雪輝は、由乃に逃がしてもらう際に彼女の未来日記を受け取った。彼のポケットの中にあったそれは、彼の消滅でこうして露わになった。

由乃が切りかかってくる間に椿はそれを最後の力を振り絞るようにして踏みつけ、破壊した。

ずっと。ずっと会いたかったそれは、すぐそこにあるのだ。そんな状況でむざむざと差しだ出すような命は持ちあわせてはいない。

※

「もうすぐ……、雪輝君が、やって来ます。彼は、手毬を投げ、て……あなたたちの注意を、そちらに向けている隙に、ダーツで私の日記を、……破壊します」

これが千里眼の巫女、春日野椿の告げた“神託”である。

そう伝えた上で彼女は更に、合図をしたら放送を終えるまで２ｎｄを犯す振りをするように。そうして雪輝が現れたら、２ｎｄを警戒しつつも敢えて”神託”通り手毬に注目するように。

最後に、近くにいた信者に、ギリギリまで他の信者たちと同じように振る舞いながら、１ｓｔが自分の日記を破壊するのを阻止する

ようにと命じた。

２ｎｄは捕えたものの、手毬のある未来を予知した今は別にどうこうするつもりもなかった。どうでもいい。

ただ、振りだけだとはいえ、辱めを命令するなど気分のいいものではなかった。また、真っ先にそんなことを思いついた自分自身についても、今はそう思う。

しかし、雪輝をこの場に連れてくるためには、そうする以外に考えられなかった。

手毬を手に入れるというだけならば、こんな無謀と言って相違ないようなことをせずとも、もっと賢明な手段があったのかもしれない。

しかし、彼女は手毬を手に入れるのと同時に、ＤＥＡＤ　ＥＮＤを回避しなければならなかった。

この時点では日記にはっきりと書かれているが、ＤＥＡＤ　ＥＮＤ回避を主眼に置いて未来を書き換えようとすれば、手毬を見失うことになるかもしれない。

自分を支えてくれていた、とても大切なもの。たかが可能性のひとつだったとしても、それをまた「視えない世界」に見失うのは絶対に嫌だった。

仮にＤＥＡＤ　ＥＮＤを回避できたところで、すぐそこにあった手毬をまた見失ってしまったら、私はもうこれ以上は耐えられない。

生きていてもそれは多分、死んでいるのと変わらなくなるのではないだろうか。

だから、最良の手段ではなくとも、椿はそれを選んだ。

たとえその演出に不可解な点があったとしても、自分に与えられた未来日記という台本に従って現実を展開させる。

そして、最後の最後で台本（みらい）を書き換える。

4（後書き）

起承転結で言えば結になるんだろうと思います。
それを意識して作ったわけではないのでだいたい結という風な具合です。

さていよいよ”選択”は次回で最終回となります。
予告するほどのものではございませんが、そのあとがきで本作品をやろうと思った経緯についてお話しさせて頂きたいと思います。

ストックが……ｏｒｚ

5（完結）（前書き）

選択自体はこれで完結ですが、この章のケツにひとつ入ります。

5（完結）

←←

雪輝が手毬を持って来た時点で交渉などの手段に出れば、このような未来は訪れなかったのかもしれない。しかし、由乃に右手を切断され、ほとんど生死の境目に居る彼女がその考えに至ることはなかった。

それに、椿は一度彼らを裏切ったのだ。そして、初対面の時から敵対している由乃を雪輝は選んだのだ。交渉が成立する可能性などどれぐらいあるだろうか。

「手毬を……」

２ｎｄが消滅して間もなく。まるで糸の切れた操り人形のように力なくその場に座り込んだ椿。その、今にも消えてしまいそうな声に、信者が慌てて手毬を差し出す。

差し出したのは男性信者だったが、椿はもうそんなことには構っていられなかった。広げたままの自身の日記にすら構わず手毬を受け取ると、そっと、しかし、とても大事そうに胸に抱いた。

どうやら、母の形見の手毬に間違いなかったようだ。

椿は日記の事も忘れて、しばらくそうしていた。幾筋もの涙が頬を伝う。普段は閉じている右目からも温かいものが溢れ出てくる。

「愛ちゃん……お願い」

何かを悟ったお鈴が、弱々しいながらも愛を制した。

「……」

愛ははじめはお鈴のそれを聞き受けるつもりはなかったのだが、椿の様子をずっと見ていると、たとえ自分の立場を考慮したところで結局行動には移せなかった。

本当なら自分だって椿を見過ごしたくはなかった。だから儀式に異を唱えることはできずとも、細やかながらせめてその苦しみだけでも和らげられればと苦心してきたつもりだ。

私だって本当は――。

そう言おうとしたが、そういった思いは結局ため息となって、愛の口から漏れ出た。

「ありがと」

それが答えだったのだろう。そう捉えたお鈴はストレートに感謝の意を伝えたが、愛は鼻を鳴らすだけでそれには答えなかった。

きっと今は”いずれ”の時ではない。今はまだ、椿に再会の幸せをたくさん味わって欲しい。お鈴は愛と一緒に椿を見守った。

そんなやり取りがあったことも知る由もなく、椿はずっと手毬を抱いている。

「どこ、に……行ってたの、よ……」

絞り出すようにそう言うと、そのままゆっくりと音もなく畳の上に倒れた。それでも手毬は、腕の中に。

彼女の生命は依然危険な状況に置かれているが、お鈴や愛、手当てを指示した信者はじめその場にいた全てが何をどうするということもできずに、ただじっと椿を見ていることしかできなかった。

――お母さん。お父さん。

――お願い。もう「視えない」世界には行かないで。

強く、焦がれるほど待ち望んだ時が訪れたのに、その声は酷く弱く、情けないほどに掠れた鼻声だった。

椿の目から、涙が止めどなく零れ落ちている。

「ずっと、『視(そば)える世界』、に……居て、……ね」

幸福のままに瞳を閉じると、彼女はそのまま動かなくなった。

※

美神愛と宮代お鈴がお目方教に出入りするようになって間もなくの頃。

「だっかっら！　６ｔｈを助けるのは無理だって言ってるでしょう、お鈴」

お目方教本部一室。そこは普段ほとんど人の出入りがないため、自然と愛とお鈴が密会する場所となっていた。

「でっ、でも。愛ちゃん……」

お鈴の声はとても頼りなく響く。自分でもその発言に迷いがあるということを強く自覚している。

「このままじゃ６ｔｈがあまりにも可哀そうだで」

それでも、どうしても言わなければならないよう気がした。

そんな様子のお鈴を見て、これまで何度こんなやり取りをしただ

ろうかと愛はため息を吐いた。

「いい、お鈴。私たちとお目方様、６ｔｈは敵同士なのよ？」

普段、他の信者達や本人の前ではお目方様と呼ぶよう心がけているが、ここでは二人とも椿のことを６ｔｈと呼んでいる。

また、ここでの会話の内容は椿に報告するものではないため、その性質上千里眼日記で筒抜けになるということはない。

「私たちの目的はお目方教に潜り込み内偵をすること。６ｔｈの境遇には同情するけど……」

同じ目的でお目方に潜り込んだ愛とお鈴だが、この二人には決定的な違いがある。

「”いずれ”倒さなくてはならない相手！　今は大人しく他の所有者の情報を集めるべきだわ！」

美神愛は春日野椿と同じく、未来日記の所有者である。仮にその過程で同盟を組むことがあったとしても、結局最後は殺し合わなければならない。

「……」

お鈴は何か言いたげに口を動かそうとしていたが、終ぞその言葉が紡がれることはなかった。

この話を持ち出すと、決まってその残酷なまでの現実に二の句が継げなくなる。

お鈴にも、愛以外にもとても近しい所有者がいる。

――所有者と非所有者。

しかしその決定的な立場の違いから、愛と同じレベルでは徹底的にはなり切れない。

それでも非所有者には非所有者なりに、一人の人間、一人の女として抱える悩みもある。

お鈴はその狭間で身動きが取れないでいた。

結局その日も、いつも通りの結末を迎え、内偵（しごと）に戻った。

←←

春日野椿は――手当ての時点で信者が予め連絡していた――救急車に乗せられて、病院へ運ばれた。

椿の事は救急隊員に任せているために、信者達はただその様子を見守るしかなかった。

そんな中、宮代お鈴は破壊は免れたものの、持ち主の手を離れ放

置されたままになっている千里眼日記の元へ歩み寄った。

それを拾い上げようとしたところ、日記は開かれたままになっていたため、そこに書かれている持ち主でさえ見ることのなかった未来が否応なく目に入った。

お鈴は日記を閉じると、その巻物をじっと見つめた。そして、その姿を複雑な表情で見つめる愛に気付きつつも、自ら付添人を名乗り出て救急車に乗った。

書き換えられた、その先にある未来に従って。

5（完結）（後書き）

未来日記パラレル　選択＞了＜

完結と書いている文章を了で締めくくるというのはありなのだろうか……。

最後までお読みくださり、ありがとうございましたｍ（　）ｍ

早速ですが、構成やっちまったような気がするので数日後ぐらいにまたやり直すと思います。
つっても、区切りのやり直しだけで文章は何らいじらんと思います。
構成なんぞ全く頭に入れずに作るからこういうことになるのでしょうね。参りましたｏｒｚ

さて前回の予告通り本作品を書こうと思った経緯の話を。
※以下、軽いネタバレあります。ご注意ください。

元々未来日記はアニメから入ったクチなのですが、バックグラウンドが酷く凄惨だった椿さん（恐らく全所有者の中で最も不幸な人でしょう）が2話分で早々に脱落（そういった待遇込みで最も不幸だと思います）というのが余りにもショック過ぎたんがきっかけだったと思います。せめてちったぁええ思いしてほしかったと。
多分僕マドまぎのマミさんといい不幸萌えなんだと思います（不幸萌えなら美樹さやかだろという声も聞こえてきそうですが……）

こんなにバックグラウンド盛ってんだから後々出てくるよね？と全巻読んだものの別段そういうわけでもなく、確かに最終巻やパラドクスでは救われてはいますが、言ってみりゃあれはどちらも2巡目ではないわけで、そう考えた時に

2巡目と3巡目（もっというと1巡目とパラドクス世界線）の同一人物を同一視していいのだろうか

という疑問があったわけですよ。
パラドクスでＨＡＰＰＹＥＮＤ的なものを迎えてもリセットされて結局元の木阿弥。
まぁんなこと言いながらも秋瀬が未来を変えたことは無意味ではないというのには禿同です。パラドクスでは相当ブヒらざるをえなかったわけですからｗ

話がやや発散していますね、いけません。
つーわけで結論として2巡目の椿さんが救われるというオリジナルは存在しない。
ならば作りましょうというのが経緯だったように思います。

さんざっぱら2巡目2巡目言っておりましたが、設定とかの確認変更の段階でどうせなら1巡目にしようずということにしました。こ

れまでの持論全部ガラポンしてますね、すいません。1巡目で勝ち残れば（由乃が神にならんけりゃ）あの2巡目はないというターミネーター的発想でカバーしてくださいw

いや結局何が言いたいって椿さんが好き過ぎるということなんですw

全くの余談ですが1巡目で由乃輝が心中未遂した部屋って御目方教屋内と思うのは僕だけでしょうか？

ストックが……orz

一応、次の章に入る前に1クッション挟む予定ですがこれが最低で数日かかる予定で、

新章は完全未定でお願いしますorz

区切り完成ごとに出したいのですが、それだと話を進めていく過程で最初と書いてあることが違ってきて修復不可能になるのがとても怖い。ので一つ章書き上げるまでは全くあげれんのです。

だいたい本章が既にそういう状態に陥っているのではないかと戦々恐々としている次第ですからorz

そんな僕ではありますが、重ね重ね未来日記パラレル　選択　最後までお読みくださり誠にありがとうございましたm（__）m

また次回お会いしましょう。

あれ？本文より文字数多くね？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3915ba/

未来日記パラレル

2012年1月14日13時46分発行